

映画に描かれた疾患と募る想い 安東教授のシネマ回診

安東由喜雄 著



安東先生の「映画に描かれた疾患と募る想い 安東教授のシネマ回診」が上梓された。この本は「映画と遺伝性疾患」をめぐる書籍シリーズの第五作目である。医療人として、また医学研究者として、第一線で経験されている事柄に関してご自身の想いを書き記されたものであり、月刊『メディカルクォール』誌に連載されていたコラムをまとめたことから始まったと聞いている。2001年の連載開始から17年にもわたるシリーズのものでありながら、あらためてはじめてから読み直してみても新鮮であり、独特の視点の話題と、その感受性・洞察力・文章力には驚かされる。我々は当然ながら、それぞれ独特の考えで医学・医療にかかわっている。そのような考えを医療関係の印刷物に寄稿させていただく機会は、ないことはない。しかし、せいぜい5回の連載で枯渇してしまう。それを10年以上にわたって発信し続けることができる感受性・洞察力・表現力には舌を巻く。医療関係者に限らず、一般の方々が読んで楽しめるなかなか面白い著作である。

安東先生と個人的に知り合いになったのはいつの頃だろうか。振り返ると昭和の終わりに、熊本大学で開催された日本臨床検査医学会・日本臨床化学会の九州支部総会のような気がしている。主催者であった熊本大学教授・岡部紘明先生を盛り立て、裏方として学会の準備を遺漏

なく取り仕切っていたのが、当時、熊本大学医学部臨床検査医学講座の講師であった安東先生である。私にとっては“由喜雄”という漢字が印象的であったし、その武骨な“見かけ”とは裏腹に、細かいところまで配慮され何よりも心がこもった学会の準備は印象的であった。さらにここがポイントだが、安東先生は裏方に徹するだけではなく、強烈な自己主張を“嫌味なく”入れ込んでいたのである。要するに、嫌味ではなく外連味のない“自己宣伝”である。これは凡人にはなかなかできることではない。“へー!”というのが第一印象であった。それ以来“安東”の虜になっており、爾来30年、ありがたいことに今日までお付き合いをさせていただいている。

この間、安東先生が上梓された映画にまつわる本は拝読している。その文章の独特の雰囲気と視点、さらに当然ながらその分析に特徴があり、“ハッ”としたり“エッ”と思ったり、読んでいて飽きることがなく蘊蓄があり面白い。いつの間にか安東先生の次の本の出版を心待ちにしている。言わず語らず、医療人としての在り方、医師としての根源的な姿勢を説いており、ぜひ多くの方々に読んでいただきたい。

(佐世保市 保健所長/九州大学 名誉教授
濱崎直孝)

<四六判/288頁/本体2,000円+税/医歯薬出版/2018>